古日本文学発生論

増補新装版

藤井貞和

発生論学

増補新装版

藤井貞和

思潮社

古日本文学発生論　増補新装版

著　者……藤井貞和
発行者……小田久郎
発行所……株式会社思潮社
162 東京都新宿区市谷砂土原町三―十五
電話三二六七―八一四一（編集）・八一五三（営業）・八一四二（FAX）
振替東京八―八一二一
印刷所……福田印刷
発行日……一九九二年四月一日
（一九七八年九月十五日、初版第一刷）
ISBN 4-7837-1547-5　C 0021

目次

亡滅の歌声
詩と鋳型——9
古代詩と近代詩——11
亡滅の研究——14
異郷の構造
〈思ひ〉の呪術——17
世と常世——22
叢の底から
サク神信仰——25
大荒（サケ）大明神——28
常世の蟲信仰——32
南のうたの方へ　神歌私注（上）
問題の所在——35
古代村落の隣——40
祖神の祭り——46

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いずみを覓めて　神歌私注（中）
神話的空間——52
村立て神話——55
村立て神話・続——59
神歌が並行して——61
シルエットの呪謡　神歌私注（中の二）
巫者の領域——67
巫者の領域・続——74
叙事の部分——78
英雄の死　神歌私注（下）
呪謡から儀礼へ——85
宮古島の史歌——88
勇者をうたう——90
寿と呪未分論（上）
読歌の二首——99
ヨムの原意味——103
ゆんぐとぅ・ゆみぐとぅ（奄美）——107
ゆんぐとぅ・ゆんぐどぅ（八重山）——111

寿と呪未分論（下）
ゆんぐとぅ・続——116
唱えごとからうたへ——120
祭式外歌謡の発展——127
更級日記の猫——129
原古の再現ということ　神話から物語へ（一）
ふたたび「亡滅」について——132
神話の叙事歌謡——138
「昔」語りの拡がり——143
歌謡のゆくえ　神話から物語へ（二）
「古こと」と新意と——148
おもろの独自性、その末路——153
地方のおもろ歌唱者——161
古代文学の誕生　神話から物語へ（三）
神話的充実の喪失——165
童謡（わざうた）の成長——167
語部（かたりべ）の位置——171
異郷論、ふたたび——175

詩をつらぬく特徴、おわりに——177
附篇一 「亡滅の歌」黒田喜夫覚え書き——179
附篇二 日本神話と歌謡——187
附篇三 南島古謡の魅力——197
増補新装版附篇 文学の発生論と琉球文学——202
引用・参考文献目録——214
あとがき——224
増補新装版あとがき——230
総合索引

装幀・芦澤泰偉

古日本文学発生論　増補新装版

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

亡滅の歌声

詩と鋳型

詩の鋳型というものを考えてみることができるとすれば、現代詩の一篇の作品は、詩の鋳型をひそかに作り出すことによって書かれ、それから、おそらく、別の、新しい作品を生み出すためには、惜しげもなく、以前に使用した鋳型を、こわさなければならない。

現代詩に、無から作品を生みだすような自由はない。ことばというおよそ最も保守的なものによって、いきなりしばられている。知らず識らず、詩の鋳型を作り出す工房のなかに書き手はおかれている。

詩の鋳型を作り出してから、そのあと詩が書かれるということではない。それならば新式の定型詩であるのにすぎない。そうではなくて、定型を否定するようにして詩が書かれるためには、固有の鋳型を、書き手は積極的に創造し所有する。

一篇の作品が生み出されるとは、その鋳型を創造し所有することをさしあたり意味している。或る

一行から或る一行への移徙、用語の選択、取捨、一行の音数、位取りのようなもの、推敲のあらゆる操作をつうじて詩の鋳型はつくられる。現代詩がそのようにして行分け詩を追求し、あるいは散文の形式をあえてとるものであることはほとんど経験的な事実ではないか。

経験的、とは、さしあたり現代日本語としての経験的な事実という意味で言うのだ。ふたしかな部分を極力排除しても、結局これだけは残る、という意味でいえば、詩作ということに関して、現代日本語が、これだけは経験的な事実だ、というようにいえるもののひとつは、詩作というものが鋳型なしでは済まされない、といったようなことになるであろう。

小学生たちが詩らしきものを書くのを、否定するようなひとはいないだろう。詩らしきもの、とでもいう以外に言いようのない幼い淡い凝縮を、拒否しなければならない理由はどこにもない。現代日本語の茫洋とした散文的なひろがりのなかに、詩らしきものを幼く淡く凝縮させようとする欲求は、けっして教師が教場で強要するからではなく、もっと深い理由にもとづくものであるのにちがいない。見よう見まねで行分けをほどこしたりしているのは、幼い鋳型をつくり出しているのだ。たとえそれが、詩とはそういうものだと思いこまされているからであるにしても、半面、現代日本語じたいの欲求でそれがあることは、否定しえないことである。

詩の鋳型を作ることによって詩が書かれているのだ、ということは意識的、自覚的に考慮されていることではない。詩の鋳型を作り出すことと、それによって詩をうみ出すこととのあいだに明確な二段階性や時間差があるわけではないから、詩の鋳型を作り出すことによって作品を書いているのだ、という現代詩のなかのさいごの定型問題は、無意識的、無自覚的な深層へ帰っている。

無意識的、無自覚的であることは、現代詩に課せられた危険な自由である。つまり新しい詩をつね

に生み出すためには、いわゆる定型から切れていなければならず、既存の形式からの自由ということは、課せられているわけだが、一方、無意識的、無自覚的であることは、書き手が、安易に自己の鋳型を作り出したまま、同じような鋳型のなかに安住する無自覚、無意識をもゆるすので、危険な自由なのだ。

作品の一回性において、一般に、詩の鋳型は、つぶされなければならない。同じような鋳型のなかに安住する十年一日的書き手のなかでは、詩が古く腐ったようなにおいをたてていることが多い。新しい詩を生みだすためには、だから絶えず、何かをこわさなければならない。

詩を書くことは、そうしてみれば、何かをこわしている風景に似ているし、事実、それは深い近代的理由をもって、説明のつくことである。私たちは明治四十年代から萩原朔太郎への、口語自由詩をつくり出すという近代詩史上の事実を知っている。その意味するところをとりちがえてはならない。近代というものが、何かのこわれたかたちから成り立っているから、近代詩もまた、自由詩にならざるをえなかったのである。こわれた風景のうえに花をひらかせる近代詩であるから、口語自由詩にならざるをえなかった。そこに定型はこわれた。当然のことではないか。

古代詩と近代詩

近代詩が、口語自由詩のかたちを課されるにいたって、数千年の詩の歴史は、遠いへだたりを極限まであらわしたといえる。しかし不変の部分もまたあるであろう。

発生する初期の古代詩や古代詩一般は、われわれの近代詩や、現代詩的努力と、ちょうどむきあっているように想われる。たんに過去と現在とがむきあっているという印象ではなしに、定型からふっきれた詩的極相において、いわば科学的に、古代のなかの詩の発生と、われわれのなかの詩の発生とを対応させることのできる地点へ出た、というふうに想われるので、問題に立ててみるのだ。

たとえば、文献にあらわれたかぎりでみても、初期歌謡にみいだされる或る種の〈自由〉を、音数や句数や語と語との結合や修辞や発想など、あらゆる面に観察しうることであるが、それは近・現代詩の自由と、対応しているであろう。

初期歌謡はおおざっぱに言って定型的なものがしだいに確乎として形成されてゆく過程にあるが、おそらくそれは、われわれのなかの詩の鋳型を一回的に創出する努力と、深いところで対応している。かれにあっては無時間的な繰りかえしにおいておこなわれる詩の発生が、近代詩においては一回的である。古代における集団的な、呪術的な性格は、個人的な密室工房がそれに対応している。

ここでもうひとつの、経験的な事実を述べておいた方がいいだろう。現代日本語が、経験的に、詩らしきものに、どのように出会い、詩であるものを感じてゆくのかということについて、それは、ほとんど外来的ななにものかであるように出会うであろうという事実である。

人生の初期やある段階で、詩をふいに書きたいと想い、あるいはふと詩を読みたいと想う、そういう気持になることの理由をだれも、たぶん、自分に説明することはできないので、経験的な事実であるほかはないが、おそらく私の推定にまちがいなければ、そのような気持は、より深く日本語なり言語一般なりにふれてみたいという、欲求にかられた気持の晶出であって、現代日本語が喚び出す経験的な事実であるということができよう。

詩は外来的ななにものかとして訪れる、という経験的な事実は、より深刻に、詩作の密室工房においてあらわれる。それは現代日本語が、詩を実現しようとするときにあじわう、経験的な事実であって、詩は、鋳型なしでは済まされないというひとつの経験的な事実と、それにもかかわらず詩は、外来的ななにものかであるというもうひとつの経験的な事実とを、深刻にもかかえこむかたちに、問題をあらわしてくる。

詩が外来的にふれてくる経験は、古代的な詩の残存であるといってもいいし、不変の部分であるといえばもっと正確な言いかたになるだろう。それは、くりかえすようだが、言語が、発生以来、経験してきたことであって、言語の詩的能力とでも名づけられるべきものである。折口信夫はいまわれわれの目にふれる記紀歌謡のはるか以前に、長い詩の歴史を眺めている。詩的能力が言語に発生するのはすでに長いその前史に負っている。宗教信仰にまみれた詩の発生史から判断すれば、詩的能力の発達は外来魂・外来神の長い歴史のなかで培われたものであろう。

現存する古代歌謡はほぼ古代国家成立以降のものと推定されている。しかしそれは、古代国家成立以前的段階と闘争し、懐柔してきたことの歴史を歌謡歌謡のひだにきざみつけている。現存の古代歌謡はそのようにして出発した。折口のかんがえた文学（＝詩）の発生は、古代国家成立以前的段階におかれている。それは徹底している。古代国家成立以降の社会のなかに、それ以前的段階を探求する。さらに現代にのこる古代生活・古代社会の研究も、文学の始原的発生段階をさぐりとるためである。折口の古代研究とは、古代的生活の研究という意味で、現代にのこる民俗的基層の探求も〈古代研究〉にほかならなかった。

もういちどくりかえすと——

詩がなんらかのかたち（鋳型）を要求することと、詩は外から付着するようにして個人をおとずれる、ということとは、ふたつの、現代日本語の経験的な事実、としてあるだろう。そのふたつは、古来的なものとしてあるだろう。古代詩の問題として考察できることからである。前者は定型を詩が必要としていったのは何故か、という問題へつらなり、後者は、宗教的欲求が詩的能力を育成していった次第を端的に説明する。

しかし、以上の二点は、それ自体の解明をするのが困難である。無文献時代にそれらはその発生を負っている、あるいはすでに発生を終えているからにほかならない。折口信夫はその無文献時代に焦点をあてるという民俗学的方法を創始した。私一個としては折口の方法で満足すると考える。けれども、そうした問題を、歴史的過去へと、一々貼りつけなければ気がすまない現代に来ていることも事実であるように想われる。

現存している古代歌謡は、今述べたように、古代国家以前的段階との闘争形態や懐柔色調を中心にしている。それはすでに宗教祭式的傾きが強くない。つまり、古くない。そのような新しい段階のただなかから、亡滅の歌声をききとどけなければならない。国家論をひきつけて、国家の古代的成立以前から以降への、いってみれば右のような折口的課題を探求した吉本隆明『共同幻想論』〔吉本a〕と新しい同『初期歌謡論』〔吉本b〕は、国家にたいする理解が現実的に行きとどいている分だけ、折口より、わかりやすくなっているといえるだろう。より亡滅させられる側に身を置くことで黒田喜夫「一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com